

われらが街の
誘致企業

株式会社エスプールリンク

▼本社 東京都千代田区

▼所在地 城東北3丁目10の1（さくら野百貨店弘前店2階）

▼従業員数 38人（グループ全体で849人）

▼事業開始 2020（令和2）年4月1日

▼主な業務 コールセンター事務

▼会社概要（沿革）

当社は「コールセンターの開設で、地方都市に新たな活気を」という旗揚げのもと、事務系の仕事が少ない人口10万人以下の地方都市にセンターを積極的に展開し、これまでに宮崎県日南市・西都市、北海道北見市、徳島県小松島市にカフェ調のスタイリッシュなコールセンターを開設しました。これら4拠点と弘前での雇用者数はおよそ150人まで増加し、若者の地元での就職機会が増えただけでなく、主婦や子育てママの雇用促進にも貢献しており、雇用創出に苦労している地方自治体からも高い注目を集めています。

コールセンターで行っている応募受付業務の代行サービス『OMUSUBI（オムスビ）』は、企業に代わって採用募集への呼び込みや応募者対応を行い、最大限に採用効率を上げるサービスです。飲食チェーンなどサービス業の採用担

最終回は、令和2年に誘致認定となったコールセンターを紹介します。市内の百貨店舗内にオフィスがあることが特徴です。誘致企業は、地域経済に新たな風を吹き込んでいます。地元企業と共に弘前の風土を作り上げる誘致企業に、今後もぜひ注目してください。
■問い合わせ先 産業育成課（☎32-8106）

当者は、現場業務が忙しいため求人応募のメールを確認する時間が限られ、電話対応ができないことも少なくありません。超売り手市場における対応の遅れは、致命的な弱点になってしまいます。そこに私たちが仲介することで、サービス導入企業の平均的な採用効率は2.1倍に向上し、採用広告費は32%まで削減することができました。

現在200社以上の企業で導入され、10万店舗の代行を行っています。皆さんの身近なお店も、実は私たちが対応させていただいていることがあるかもしれません。



◀ オフィス外観

百貨店の婦人服フロアの一角にあります。買い物客からは内部が見えないように配慮されたデザインオフィスです。



◀ オフィス内部

ガラス張りの開放的な雰囲気の中で働いています。オフィス脇のミーティングスペースもリラクゼーション空間です。

働く人からひと言！

現在の私の仕事は、仕事をしたい応募者の方との面接日程を調整するスタッフ（オペレーター）へのフォローが主です。応募者の方への対応についての質問や不明点をオペレーターから聞き取り、その他業務で困っていることを面談するなど、より良い職場環境となるように日々努めています。弊社で働いているスタッフの9割はコールセンター未経験者でした。研修後も先輩オペレーターの隣に着席し、わからないことはすぐに聞ける体制をとっています。未経験でも安心して仕事をすることができます！

また、ネイルや髪形も自由なので、スタッフはおしゃれも楽しんで仕事をしています。女性が多い職場ですが、男性スタッフも活躍しています！

センターが開設されてから1年が経ちますが、離職者は0人です。働きやすく雰囲気が良い職場を今後も保てるように努めていきたいと思っています。

▲ 大瀬 実菜子さん
（2020年入社）

高岡の森歴史だより

第3回 紺糸威具足兜付（個人蔵）

現在開催中の「武具甲冑展」では12点の甲冑を展示しており、金工・漆工・染織などの工芸技術を駆使した華やかな装飾を伴うものが数多く並んでいます。その中から1点、弘前藩最後の藩主・津軽承昭（つぐあきら）が着用した、他のものとは明らかに形態が異なる具足（甲冑）を紹介します。

11代藩主・津軽順承（ゆきつぐ）には世継ぎがなく、養子の承祐（つぐとみ）も17歳で病死したため、1857（安政4）年に熊本藩主・細川斉護（なりもり）の四男・護明（もりあき）を養嗣子（ようしし）に迎えました。初めは津軽承烈（つぐてる）と称し、2年後、順承の隠居により12代藩主となり、1865（慶応元）年に承昭と改めました。

その家独自の形式を持つ甲冑を「御家流（おいえりゅう）」と呼び、伊達家や井伊家などで独特な甲冑スタイルが踏襲されましたが、承昭の生家

高岡の森弘前藩歴史館より、展示資料や歴史ネタを毎月紹介します。

■問い合わせ先 高岡の森弘前藩歴史館（☎83-3110）

である細川家にも、関ヶ原合戦で活躍した越中守（えっちゅうのかみ）細川忠興（ただおき）の具足の形式が「越中流」として伝わりました。兜や胴、臍当（すねあて）など全てがシンプルな作りになっており、袖（そで・肩から上腕部を守る防具）を用いないのが特徴で、実用性を重視し無駄な装飾を省いたものでした。

シンプルでありながらも、左腰には金小札緋威（きんこざねひおどし）の草摺（くさずり）がワンポイントになっていて、熊本藩から遠い他家へ行く若殿のために特別念入りに造られたことが分かります。



弘前の偉人たち

第15回 本県洋風建築のさきがけ
堀江 佐吉（1845-1907）

佐吉（さきち）は、1845（弘化2）年、覚仙町で誕生。幼少の頃から頭が良く読み書きに優れ、とても勉強熱心だったといいます。大工だった祖父や父の血筋をひき、大工としても優れた才能の持ち主でした。

27歳の時、県庁の官舎の新築工事で、立派な先輩の大工が何人もいるのに佐吉が棟梁に指名されました。佐吉は謙虚な人柄と優れた腕前で工事を取り仕切り、若き棟梁・堀江佐吉の名が広く知られることとなりました。

佐吉は、1874（明治7）年に参加した兵営工事をきっかけに洋風建築に深い関心を抱くようになります。その後、出稼ぎ先の函館で工事に従事

市教育委員会が発刊している「新・弘前人物志」から、弘前が生んだ偉人たちを毎月紹介してきましたが、今回が最終回です。皆さんの興味を引く偉人と出会えましたか？

■問い合わせ先 教育センター（☎26-4803）

しながら西洋建築物を見て回り、見取り図を作って構造を研究したり、左官たちを訪ねて設計図の写しをもらったり、基礎的な勉強を続けました。

青森に戻ってからは第五十九銀行（現在の旧第五十九銀行本店本館）や旧弘前市立図書館などを設計。誠実で妥協を許さない仕事ぶりでした。

佐吉も病気には勝てず、1907（明治40）年、弟子や家族に見守られて亡くなりましたが、佐吉の手掛けた建築物は今でも、美しく堂々とした姿で残っています。

弘前が生んだ傑出した人物を紹介した「弘前人物志」は、1982（昭和57）年に初めて発刊されました。詳しく知りたい人は「新・弘前人物志」をご覧ください。

